



いわき市は昭和61年に  
非核平和都市宣言を制定し、  
令和7年に40周年を迎えました

# と ふうせんばくだん きじゅうそうしゃ 飛んでいく風船爆弾、機銃掃射

## きじゅうそうしゃ み こわ 機銃掃射を見た。「怖かった」

2018(平成30)年に勿来地区に住む女性の体験談を聞いた。この当時76歳だったと思われる。

終戦の年は3歳で、呉羽化学門前にあった自宅に暮らしていた。調べると、呉羽化学は1945(昭和20)年8月13日に、イギリス軍艦載機による機銃掃射を受け、1名の死亡者を出している(いわき市史第4巻近代Ⅱより)。この時、植田駅のホームも銃撃され、負傷者1名がいた。女性は呉羽化学への機銃掃射を目撃していた。とても怖い思いをしたと話した。

この機銃掃射は、錦町に住む男性からも目撃談を聞いたことがある。2015(平成27)年以前のことになる。男性は女性よりほんの少し上の世代、「当時は小学生だった」と話していたと思う。

男性は、呉羽化学の煙突に向けて、繰り返し、繰り返し、機銃掃射する連合軍艦載機を見ていたという。男性は戸外にいて艦載機の飛来に気がついた。自分に向かって飛んできたら大変なことになる。そう考えた男性は近くの竹やぶに逃げ込んだ。怖かった。しかし、震えながらも竹越しに艦載機の様子を見続けた。

冷静になってから考えたという。

「もしやぶに機銃掃射があったら、あるいは、流れ弾が飛んできたら、竹やぶで命を守れるはずがない。何て馬鹿なことをしたのだろう」

当時は思い出しながら、こう話した。

### ふうせんばくだん 風船爆弾とは

第二次世界大戦のときに日本で作られた特別な風船です。この風船には爆弾が取り付けられていて、風に乗って遠い国まで飛んでいくように作られていました。風船を使って敵の国に爆弾を送り届ける工夫をしていたのです。

### きじゅうそうしゃ 機銃掃射とは

飛行機や車両に取り付けられた特別な大きな銃(機関銃)で、空から地面や特定の場所に向けてたくさん弾を連続して撃つことをいいます。これは戦争で使われる方法のひとつです。目的は、動いているものや場所を壊したりすることです。

### かんさいき 艦載機とは

戦争のときに使う特別な飛行機です。この飛行機は、普通の空港からではなく、海に浮かんでいる「軍艦」という大きな船から飛び立つことができます。そして、軍艦に戻って着陸することもできる、特別な飛行機です。



いわき市は昭和61年に  
非核平和都市宣言を制定し、  
令和7年に40周年を迎えました

## 遅らされた出航。「同じ人間、気持ちは通じる」の教え

さて、さきほどの女性に話題を戻そう。

女性の父親は技術者で、女性が生後4か月の時に徴兵された。自宅には親戚一同がおさまった写真があった。親戚たちが囲んだ真真中に自分や父親がいる、出征前に撮った写真だ。父親は終戦間際にグアムから別の任務地に転属し、そこで終戦を迎えた。終戦は、米兵が使っていた「戦争は終わった」と呼びかけるポスターで知ったという。

帰国の時がきた。父親が乗り込んだ、帰国船に向かうジープが不幸にも故障してしまった。出航時間は迫っている。“帰国断念”の言葉が、父親の頭によぎった。まずは状況を伝えなければと考え、船に連絡をとった。状況を知った帰国船は出航時間を遅らせてくれた。この温情で、無事に帰還を果たすことができた。

父親はこの体験を踏まえ、「同じ人間だから気持ちは通じる」と、子どもたちに繰り返し語り聞かせてくれたという。

## 3歳に祖母避難の役割

この女性には万が一の際に、家族から与えられた役割があった。体の不自由なおばあさんの手をひいて避難する役割だった。避難先は自宅近くの橋げたの下で、必要な身の回り品などが用意してあった。

人の命を守る重要な役割が3歳の子どもの与えられていたことに驚く。また、3歳当時の記憶を鮮明に覚えているということも驚きだ。戦時下の体験が、幼少の心に苛烈だったことを思わせる。

## 夕陽に染まる風船爆弾

また女性は、長四角の赤い物がたくさん飛んでいくのを見たとも話した。

「それは何」。問い返した。女性は「分からないの」と切り返し、正体を説明した。

風船爆弾のことだった。こんにやく糊で補強した和紙の気球に、爆弾や気圧計と連動したバラスト(砂袋)などをぶら下げた構造になっていた。気球やこの下部の構造部分を下から見ると丸く見えるはず。しかし、



いわき市は昭和61年に  
非核平和都市宣言を制定し、  
令和7年に40周年を迎えました

かぶとおめよこみながしかくゆうひてあかみ  
下部を遠目で横から見ると長四角のようでもある。夕陽に照られれば赤くも見える。おそらくそのような場面  
だったのだろう。

ふうせんばくだんりくぐんさくせんほうきゅうほうきゅうきちちばけんいちのみやまちいばらきけんきたいばらきしほんし  
風船爆弾は陸軍の作戦により放球された。放球基地は、千葉県一宮町と茨城県北茨城市、そして本市  
なこそちくかしよほんしじょうくうにしひかしながへんせいふうのべいほんどこうげき  
勿来地区の3か所にあり、本市上空などを西から東に流れる偏西風に乗せて米本土を攻撃しようとした。  
さまざまみかた  
様々な見方があるようだが少なくとも数百個が米本土に届き、犠牲者や被害をもたらした例もあったらしい。

ふうせんばくだんざいりょうわしとうじとおのちくさかせいさんじっさいばくだん  
風船爆弾の材料となった和紙とこんにゃくは、当時、遠野地区でも盛んに生産されており、実際に爆弾  
せいぞうつか  
製造に使われていた。

とおのちくほうきゅうもくげき  
遠野地区からも放球が目撃されていた。2015(平成27)年以前のことがあったが、目撃談を聞いた。



いわき市は昭和61年に  
非核平和都市宣言を制定し、  
令和7年に40周年を迎えました

## キラキラ光る飛行体に厳命「見なかったことにしろ」

この男性は、戦時中に防空監視隊員として徴用されていた。話を聞いた時は80代だったと思う。

男性の生業は野鍛冶。鋤や鍬など、農業生産に必要な道具を製造していた。食料増産は戦争遂行に欠かせない。そのため農業用の道具を作る野鍛冶は徴兵を免れた。代わりに、国内勤務である防空監視隊員として徴用されたようだ。

ある日、遠野地区にあった防空監視哨で任についていた。すると、南の空に、多数のキラキラと銀色に光る物体が浮き上がっていくことに気づいた。遠野から見れば勿来の方向だ。

異変を察知して、本部にすぐ連絡しなければならないと考えた。遠野にあった監視哨の本部は、平のおしろやまにあったという。現在の福島県立桜が丘高等学校の近くだったらしい。連絡を聞いた本部の人間は、「見なかったことにしろ。誰にも話すな」と厳命したという。

「おそらく風船爆弾だった。だから秘密にしろと言われたと思う」と、男性は話した。

この方も数年前に亡くなられた。おそらく戦中には、もっと様々な体験をされていたと思う。聞くことができないままの永久のお別れ。悔いが残るお別れとなった。